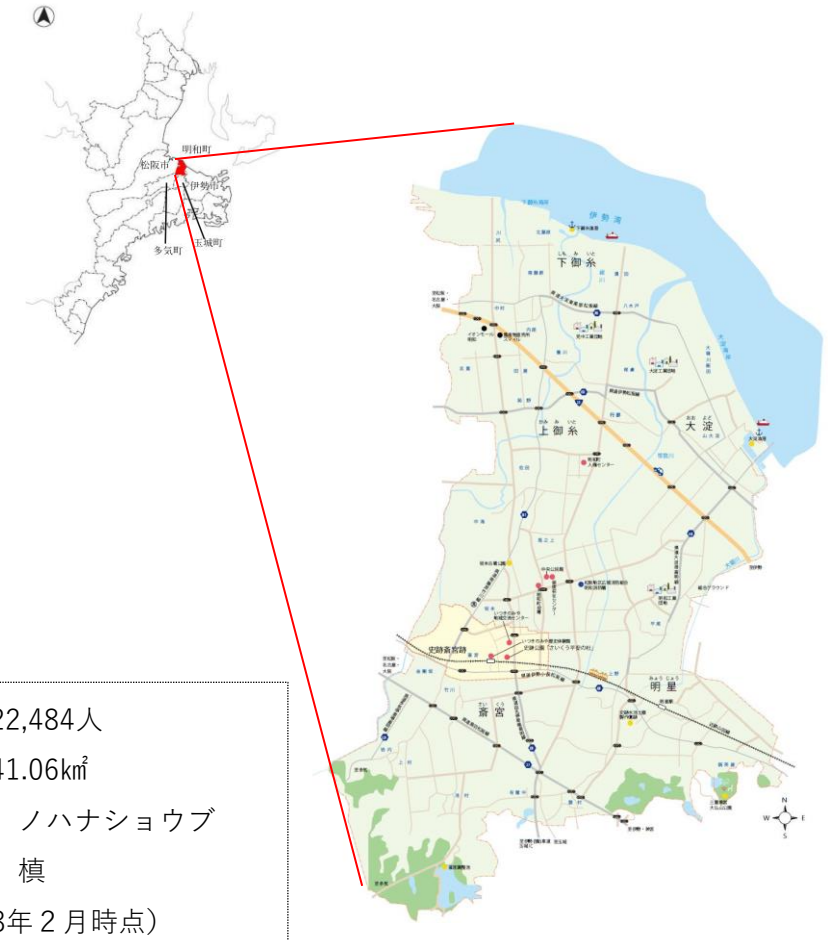
第２章

明和町が目指す未来像

１．三重県明和町について	P 9
２．明和町の現状と課題	P 11
３．明和町が目指す観光地域づくりの方針	P 16
４．観光ビジョン	P 17
５．観光ビジョン達成に向けたロードマップ	P 18

1 三重県明和町について

三重県のほぼ中央部にある伊勢平野の南部に位置し、東は伊勢市、西は松阪市に接しています。明和町は広々とした田園風景に囲まれ、豊かな海産に恵まれています。また、天皇に代わり伊勢神宮の天照大神に仕えた皇女「斎王」が住んでいた「斎宮」があった場所としても知られ、歴史・文化そして自然が調和する町です。



人口　22,484人
面積　41.06㎢
町の花　ノハナショウブ
町の木　槙
（令和8年２月時点）

歴史・文化

明和町は、国指定史跡である斎宮跡をはじめ、多くの文化財が点在しています。日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」をはじめ、地域に伝わる祭礼や行事などの歴史・文化が数多く、今も受け継がれている点も明和町の大きな魅力です。

自然

田園景観が広がる穏やかな環境に加え、町の北部が伊勢湾に面していることから、海と里山・田園が調和した多様な自然環境を有しています。伊勢湾は豊かな漁場として知られ、沿岸部では潮風を感じる開放的な風景が広がり、日の出など四季折々の表情が町の魅力を彩っています。

産業

明和町は、古くから農水産業を基幹産業とし、発展してきました。現在も優良農地を基礎的資源に水稲を中心とした多様な農業が営まれています。漁業については伊勢湾沿岸の遠浅で砂質の地盤を活かしのり養殖業や採貝漁業が行われています。その他にも御糸織や擬革紙、地酒といったものも昔ながらの地場産業として親しまれています。

日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」

文化庁が新たに創設した制度「日本遺産」に明和町が申請した「祈る皇女斎王のみやこ 斎宮」が平成27年4月24日に認定されました。

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に発信することにより、地域の活性化を図る制度です。

認定ストーリー要約

古代から中世にわたり、天皇に代わって伊勢神宮の天照大神に仕えた「斎王」は、皇女として生まれながら、都から離れた伊勢の地で、人と神との架け橋として、国の平安と繁栄を願い、神への祈りを捧げる日々を送った。

斎王の宮殿である斎宮は、伊勢神宮領の入口に位置し、都さながらの雅な暮らしが営まれていたと言われている。地元の人々によって神聖な土地として守り続けられてきた斎宮跡一帯は、 日本で斎宮が存在した唯一の場所として、皇女の祈りの精神を今日に伝えている。

日本遺産構成文化財

①斎宮跡

②斎宮跡出土品

③斎王の森

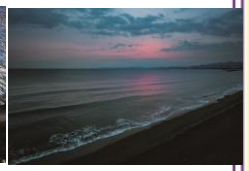
④竹神社

⑤秡川

⑥竹川の花園

⑦隆子女王の墓

⑧斎王尾野湊御禊場跡


⑨大淀

⑩業平松

⑪佐々夫江行宮跡

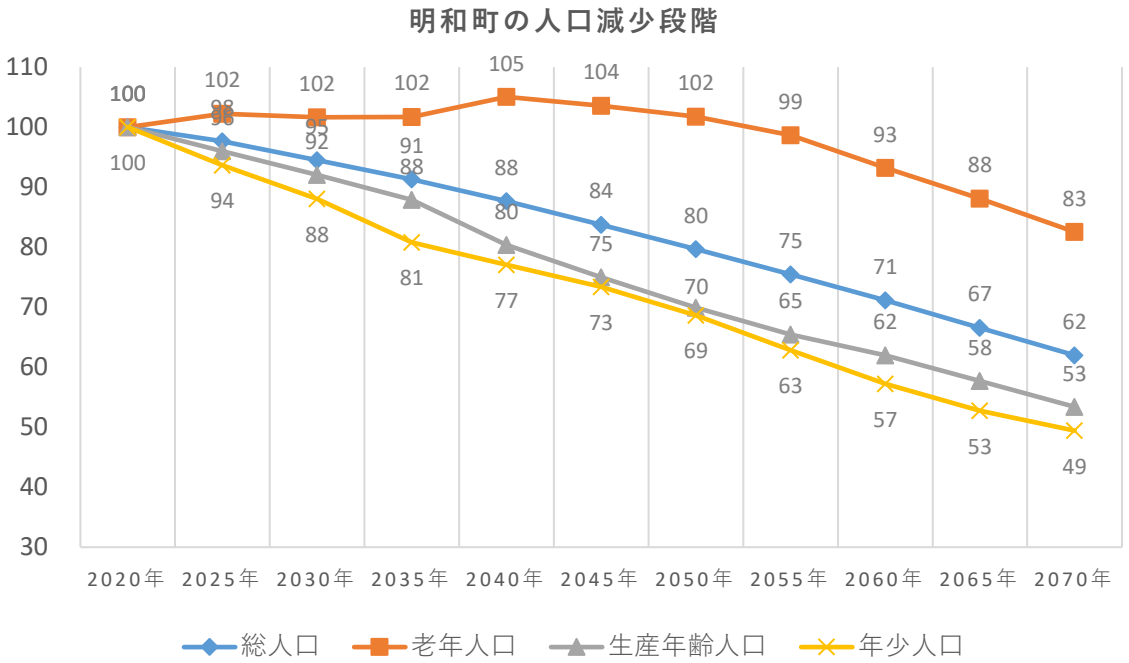
⑫カケチカラ発祥の地

2 明和町の現状と課題

現状１　少子高齢化と人口減少

明和町では年少人口、生産年齢人口が減少、老年人口が増加して推移しており、「第一段階」の人口減少段階に入っていると考えられます。

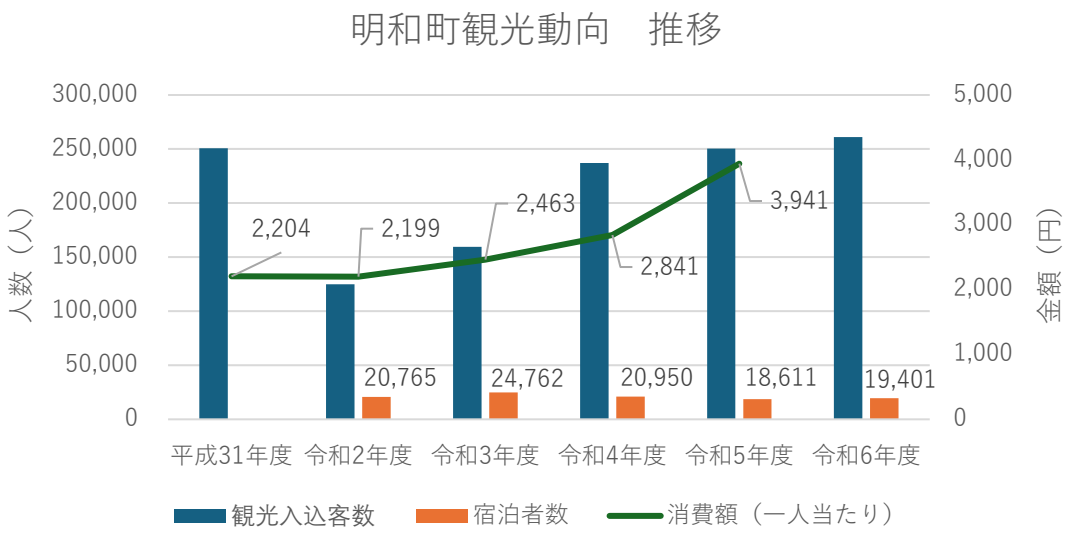
社人研の推計によると、令和22年以降は、増加して推移していた老年人口が横ばいで推移するようになり、「第二段階」の減少段階に入ります。令和32年以降は、本格的に老年人口が減少を始め、「第三段階：老年人口の減少（総人口の減少）」へと入っていくと推測されており、今後、急速に人口が減少していくことが危惧されます。



現状２　明和町入込客数と宿泊者数の推移

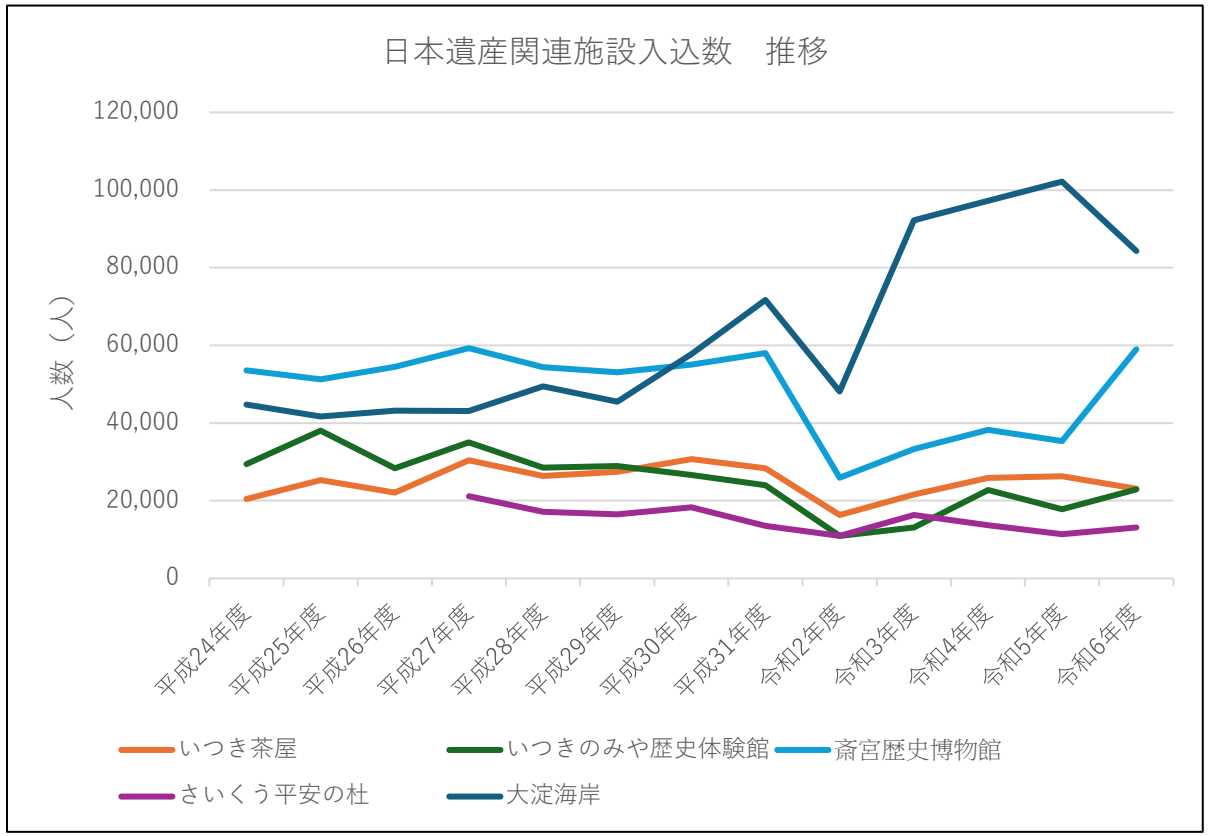
日本遺産の認定や、さいくう平安の杜開園などがあった平成27年以降、来町者数は増加傾向でしたが、新型コロナウイルスの影響を受けた令和2年から大きく落ち込みました。しかし、新しい生活様式に対応した観光施策を町や関係団体が迅速に進めたことにより、比較的早期に回復へと向かうことができました。

その一方で260千人ほどの入込客数で伸び悩んでおり、また、宿泊施設等の数が少ないこと等から地域に滞在し、経済活動を促進する点については実数値の把握方法をはじめ、課題が残ります。



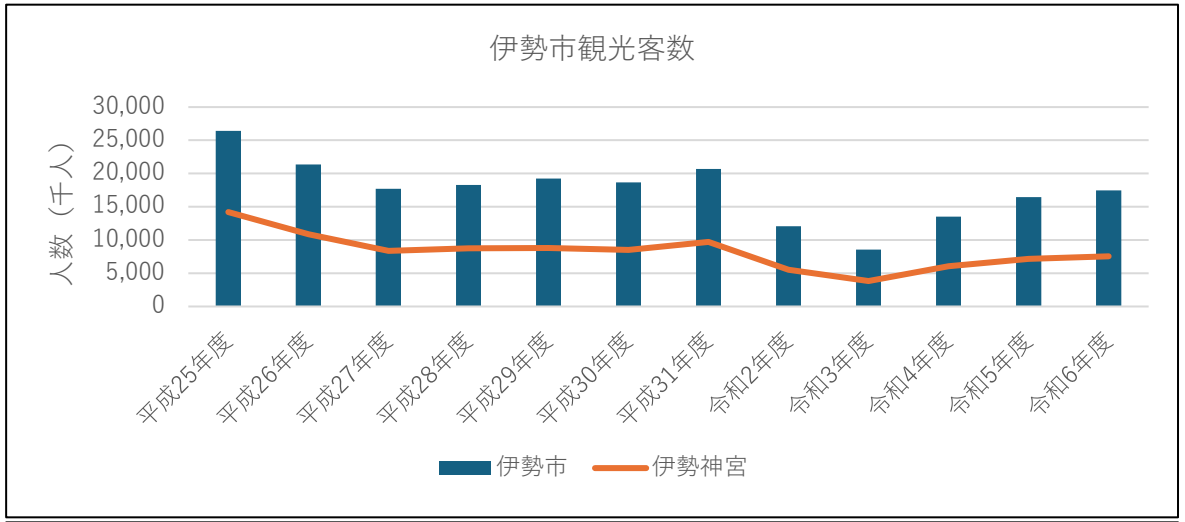
現状3　日本遺産関連施設入館者数

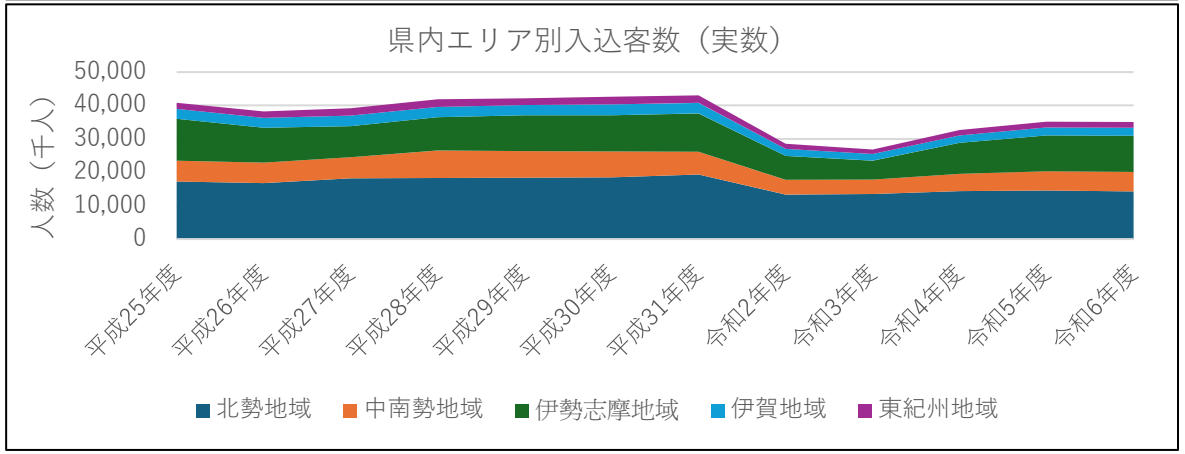
日本遺産に関連する施設として、三重県立の斎宮歴史博物館をはじめ、いつきのみや歴史体験館などがあります。こうした各施設に来館される方は新型コロナウイルスが広がった令和2年以降緩やかに回復していきました。また令和5年から6年にかけてはメディア等で「平安時代」にスポットがあたったこともあり増加しました。しかし、伸び悩みの状況は変わらずの現状です。



現状4　　近隣市町観光市場

日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」とも関わりが深い伊勢市では年間10,000千人を超える方が観光で訪れ、その内の4割を超える方が伊勢神宮にも訪れています。また伊勢志摩エリアは三重県全体の入込客数のうち約3割を占める主要観光地です。





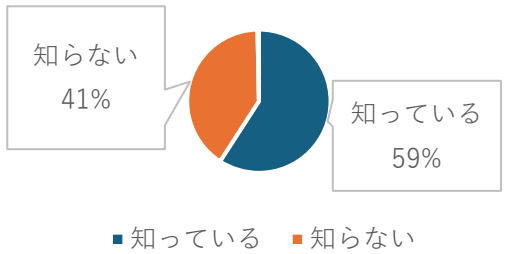
出典:令和6年三重県観光レクリエーション入込客推計書

現状5　町民アンケート

令和6年度に明和町民(20歳以上）2,000人を対象としたアンケート調査を実施し、619件の回答を回収しました。詳細な結果については、別冊「令和6年明和町民アンケート結果」をご確認ください。

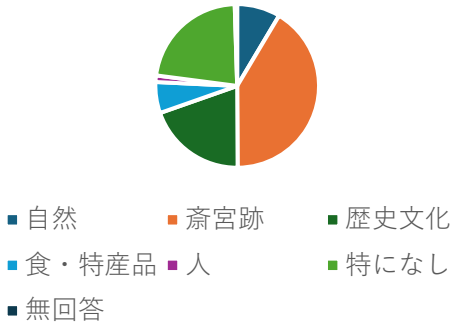
・町内に居住する18歳以上の住民から2,000人を無作為抽出して実施。
・回収率　31.0％

日本遺産認知度

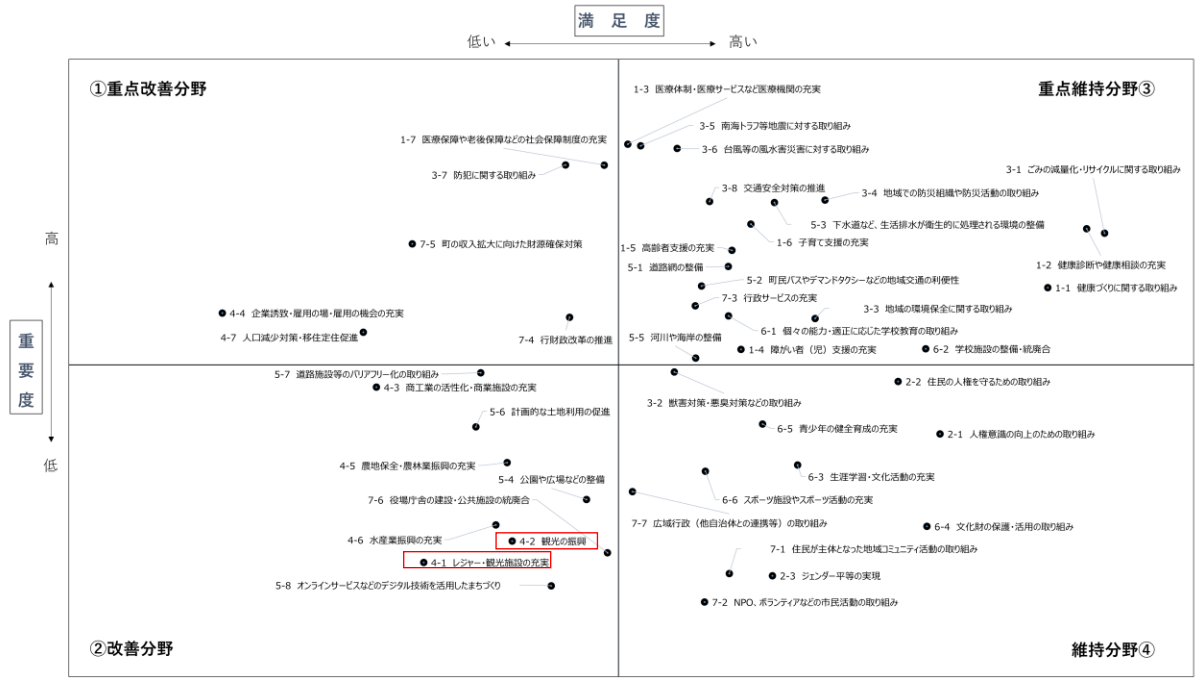


令和２年の調査では「知っている」が57%で認知度は微増です。
・20代以下の世代での認知度は20%を下回る極めて低い結果が見られました。

明和町の魅力



明和町の魅力として、斎宮跡を含めた「歴史・文化」と回答する方が60%を超えました。一方で明和町の魅力は特になしと答える方が22%を占めています。



観光の振興、レジャー観光施設の充実は、満足度も重要度も低くなっており、事業の改善を行っていなくてはならない分野に位置づけられています。
町民アンケート結果などから、「福祉・健康」「環境」「安全・安心」「雇用」などがこれからのまちづくりのキーワードであり、次の５つがまちづくりの課題となっています。

第2次明和町観光振興計画の成果

「おもてなし」の環境づくり	①連携による地域活性化	・伊勢志摩観光コンベンション機構などとの連携強化 ・伊勢と連携した観光パンフレットの製作 ・旅行代理店などと連携した団体ツアーの企画、販売 ・地域おこし協力隊制度の活用
	②史跡斎宮跡の活用	・レンタサイクル等を活用した回遊性の向上 ・インバウンドの誘客を図った特別体験の推進 ・復元建物を活用したイベントの実施 ・日本遺産構成文化財を活かした新たな魅力づくり
「きてもらう」「滞在してもらう」環境づくり	③魅力的な資源の活用	・美村プロジェクトの推進による誘客 ・オンラインによる伝統工芸品、特産品の販売 ・伝統芸能、伝統工芸への支援
	④空き家等の活用によるにぎわい創出	・伊勢街道沿いを中心にした空き家調査および活用方法の検討と改修によるにぎわいづくり ・斎宮跡保存活用計画に基づく、公有地の活用を推進 ・移住、定住、起業を支援する体制づくり
行政、民間、学校などとの「連携」を行う環境づくり	⑤郷土愛の醸成による「おもてなし力」強化	・めいわインスタグラマーによる地域からの魅力発信 ・町内小学校、中学校での郷土学習用教材の製作 ・史跡ガイドを通じた斎宮跡の魅力発信 ・ガイドの育成

目標1 観光入込客数		調査方法
R2	125,038人	町内観光拠点6か所の入館者数、行事1つの入込客数を集計した延べ人数です。
R6	269,202人	
R7目標	300,000人	

目標2 明和町内宿泊者数		調査方法
R2	21,706人	町内の宿泊事業者（民泊含む）からの聞き取りを行った延べ宿泊者数です。
R6	35,091人	
R7目標	25,000人	

目標3 観光プログラム体験件数		調査方法
R2	―	町内の魅力を体験、体感できるプログラムへ参加した方の人数です。
R6	41,708件	
R7目標	60,000件	

目標4 観光消費額		調査方法
R2	―	観光施設の入館料、や体験コンテンツ、特産品の売上を集計したものです。
R6	36,161,580円	
R7目標	30,000,000円	

現状整理と課題

近隣市町の入込客数の推移や広域的な観光動向、町民アンケートにおける観光に対する認知度・関心度の結果などを整理したところ、明和町の観光振興においては、現状の取組だけでは十分に対応しきれない点や、今後強化が求められる内容が明らかになりました。観光ビジョンの達成、そして明和町が目指すまちづくりを推進していくためにも、次のような課題を今後の観光振興を進めるうえで意識していく必要があると考えます。

現状の整理

三重県観光入込客数	28,525千人（令和2年）	⋙	35,082千人（令和6年）
周辺主要観光地客数（伊勢市入込客数）	12,062千人（令和2年）	⋙	17,486千人（令和6年）
周辺主要観光地客数（伊勢神宮参拝者）	5,538千人（令和2年）	⋙	7,542千人（令和6年）
明和町観光入込客数	122千人（令和2年）	⋙	269千人（令和6年）

1.5%

3.6%

史跡斎宮跡来場者数	147千人（令和6年）	日本遺産認知度	59%（令和6年）
斎宮跡認知度県内	37.9%（令和4年）	斎宮跡認知度県外	8.5%（令和4年）

出典:令和６年明和町民アンケート、中日新聞2022年11月8日　記事　他

課題1	**中長期的な観光ビジョンと、成果評価・改善の仕組みづくり** 観光振興の方向性や将来像が十分に共有されておらず、取り組みの成果をどのように測り、改善していく仕組みの確立が不十分です。今後は、明確な目標設定と継続的な見直し、体制を整えることが求められます。
課題2	**観光による地域経済への効果が可視化されていない** 観光が地域にもたらす経済的な効果や波及の実感が住民に伝わりにくく、観光への関心や協力体制が十分に広がっていません。成果を分かりやすく伝える工夫や、観光を一つの産業として確立していくことが必要です。
課題3	**地域資源に対する住民の認知・関心・誇りの希薄化** 地域の自然や歴史・文化などの魅力が若年層を中心に再認識されにくくなっており、地域への愛着や誇りが弱まりつつあります。地域資源の価値を再発見し、共有する機会づくりをしていく必要があります。
課題4	**情報発信力の弱さと観光コンテンツの認知不足** 地域の魅力を効果的に発信する仕組みや媒体が十分ではなく、地域の魅力や観光コンテンツの知名度が広がりにくい状況です。戦略的な情報発信やプロモーションの強化が求められます。

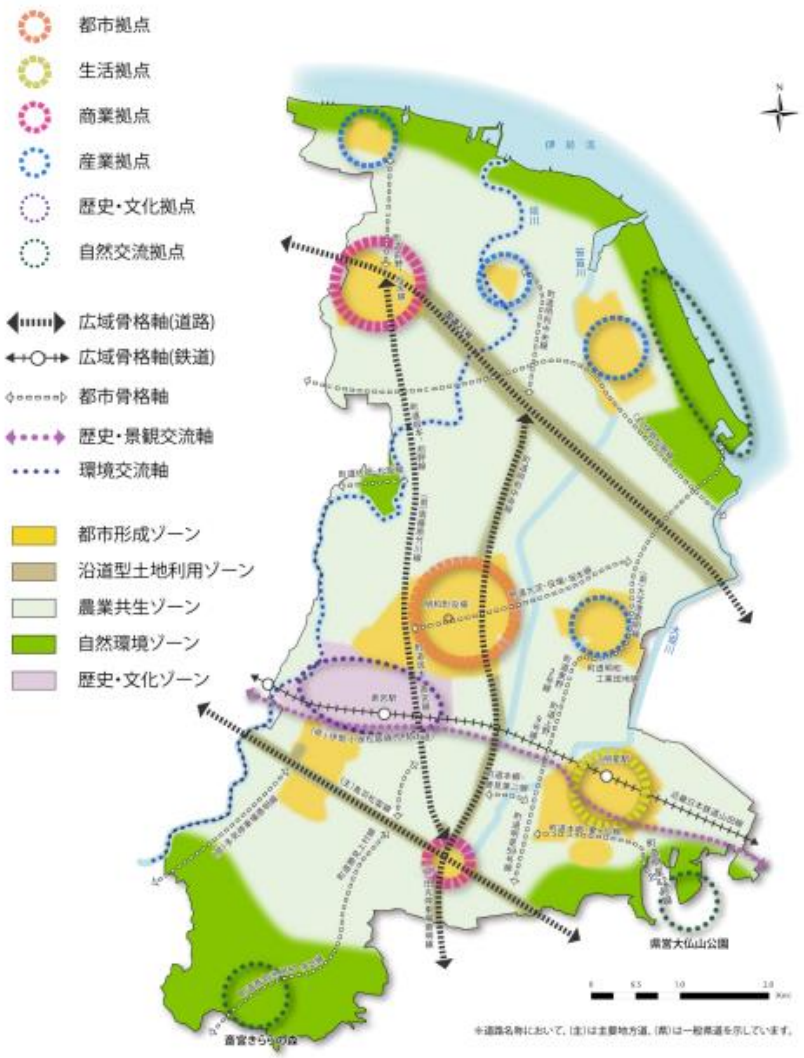
3 明和町が目指す観光地域づくりの方針

第６次総合計画において、子育て・教育の充実、地域コミュニティの強化、防災・減災体制の整備、産業振興の4分野を重要方針として掲げ、「住みたい、住み続けたい　豊かなこころを育む　歴史・文化のまち　明和」という将来ビジョンを設定しています。この将来ビジョン達成に向けて、明和町都市計画マスタープランでは町の将来都市構造を定めています。明和町の将来都市構造は「拠点」、「軸」及び「ゾーン」の３つの要素で整理し、各分野ごとに基本方針を定めています。

明和町観光振興計画においても、この将来都市構造を踏まえ、各拠点、軸そしてゾーンの特性を活かした観光振興を展開していきます。とりわけ、斎宮跡周辺に位置づけられた歴史・文化拠点を中心に、周辺の歴史・文化資源を面的に活用するほか、自然交流拠点との回遊性を高めることで、町全体の広域的な観光動線を形成していきます。

都市拠点	町民の生活の中心となる場所
生活拠点	一定の生活サービスが享受できる暮らしやすい場所
商業拠点	町内外の生活サービスの中心的な役割を担う場所
産業拠点	町の産業振興に向け、新規需要の受け皿としての役割を担う場所
自然交流拠点	豊かな自然を活かし、町内外の人々の余暇活動を通した交流を生み出す場所
歴史・文化拠点	史跡斎宮跡や伊勢街道沿道の歴史的まちなみなど、観光資源としての賑わいを生み出す場所

都市形成ゾーン	住宅地や商業・業務地、工業地などの都市的な土地利用を図り町内外の人々の都市活動を支える地域
沿道型土地利用ゾーン	幹線道路沿道などにおいて、商業・業務地としての良好な環境を保全・形成する地域
農業共生ゾーン	農地を基本とした自然的な土地利用と点在する既存集落などの都市的な土地利用の共存を図り、営農環境と多様な暮らしを支える地域
自然環境ゾーン	斎宮きららの森や北部の沿岸部などの良好な自然環境を活かし、それと調和した景観形成や町内外の人々の余暇活動の場として活用を図る地域
歴史文化ゾーン	歴史・文化資源を活かし、それらと調和した景観形成や町内外の人々の余暇活動の場として活用を図る地域



出典:明和町都市計画マスタープラン

4 観光ビジョン

明和町が目指す地域づくりの方針である「みんなでつくるまちづくり」の理念のもと、町民一人ひとりが豊かに暮らし、次の世代へと誇れる地域を育むことを目指しています。この理念を観光の分野において具現化するため、観光ビジョンとして「**住んでよし、訪れてよし、担ってよし　持続可能な観光地域づくり**」を掲げていきます。このビジョンは、**町民が誇りを持って暮らせる**“住んでよし”の地域であるとともに、**インバウンドを含む国内外から訪れる人々にとっても魅力ある**“訪れてよし”の観光地であり、さらに**地域の未来を支える産業や担い手が育つ**“担ってよし”の循環を生み出すことを目指すものです。

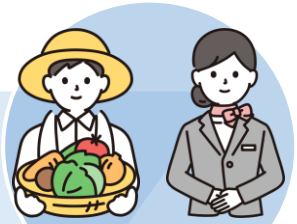
住民

住民が愛着と誇りを持って快適に暮らせること。
暮らしに潤いやにぎわいをもらたし、コミュニティ活性化を通じて、住民が「ここに住み続けたい」と思える地域を目指します。

住んでよし

観光事業者

事業者や住民など、地域づくりの担い手がやりがいや誇りを感じ、持続的に活動できること。
観光による新たな雇用創出や経済循環を通じて、意欲ある担い手を育成・確保します。



担ってよし

人と経済の好循環

来訪者が地域の魅力（自然、文化、食、暮らし）を深く体験し、満足して帰っていただけること。
質の高い体験と温かい交流により、感動や共感を生む地域を目指します。

訪れてよし

観光客

持続可能な観光地域

観光によって生み出される経済効果は、地域事業者の活性化や雇用創出につながるだけでなく、その一部が**地域の保全・活用に充てられることで、貴重な歴史・文化・自然などを次世代へ引き継ぐことで持続可能な観光地域に！**

5 観光ビジョン達成に向けたロードマップ

「**住んでよし、訪れてよし、担ってよし　持続可能な観光地域づくり**」を観光ビジョンとし、**日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ 斎宮」を核としたまちづくりと観光振興**を一体的に推進します。そのため、日本遺産を中心に伝統や行事、自然、農水産業など、地域の魅力を再発見・再構築し、交流人口・関係人口の拡大を図るとともに、地域経済の好循環を生み出す仕組みづくりを進めていきます。さらに、**近隣市町で行われる伝統行事を一つの契機とし、住民・事業者・行政が連携し、歴史・文化・自然の調和のもと、町全体で「歴史・文化を生かしたまちづくり」を展開することで、豊かで持続可能な観光地域づくりを実現していきます。**

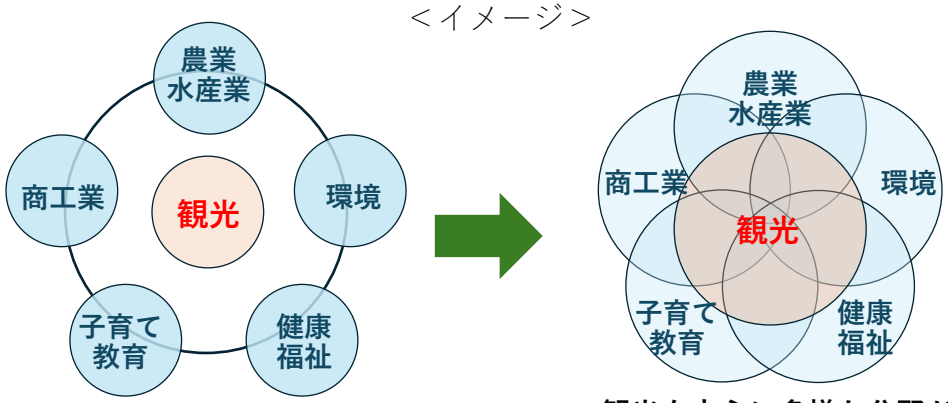
観光ビジョン

住んでよし、訪れてよし、担ってよし

持続可能な観光地域づくり

多様な分野がつながり、重なり、観光という総合産業が育成されることで
持続可能な観光地域づくりを実現する

＜イメージ＞



多様な分野がそれぞれに活動

観光を中心に多様な分野が連携して観光産業を育成

STEP 1　令和8年度～令和12年度

「伊勢の入り口めいわ」の確立

令和10年
明和町制70周年

令和11年
史跡斎宮跡指定50周年

令和15年　伊勢神宮式年遷宮（遷御の儀）

STEP 2　令和13年度～令和17年度

「めいわファン」の創出

STEP3　令和18年度～

観光による地域経済の循環を確立